

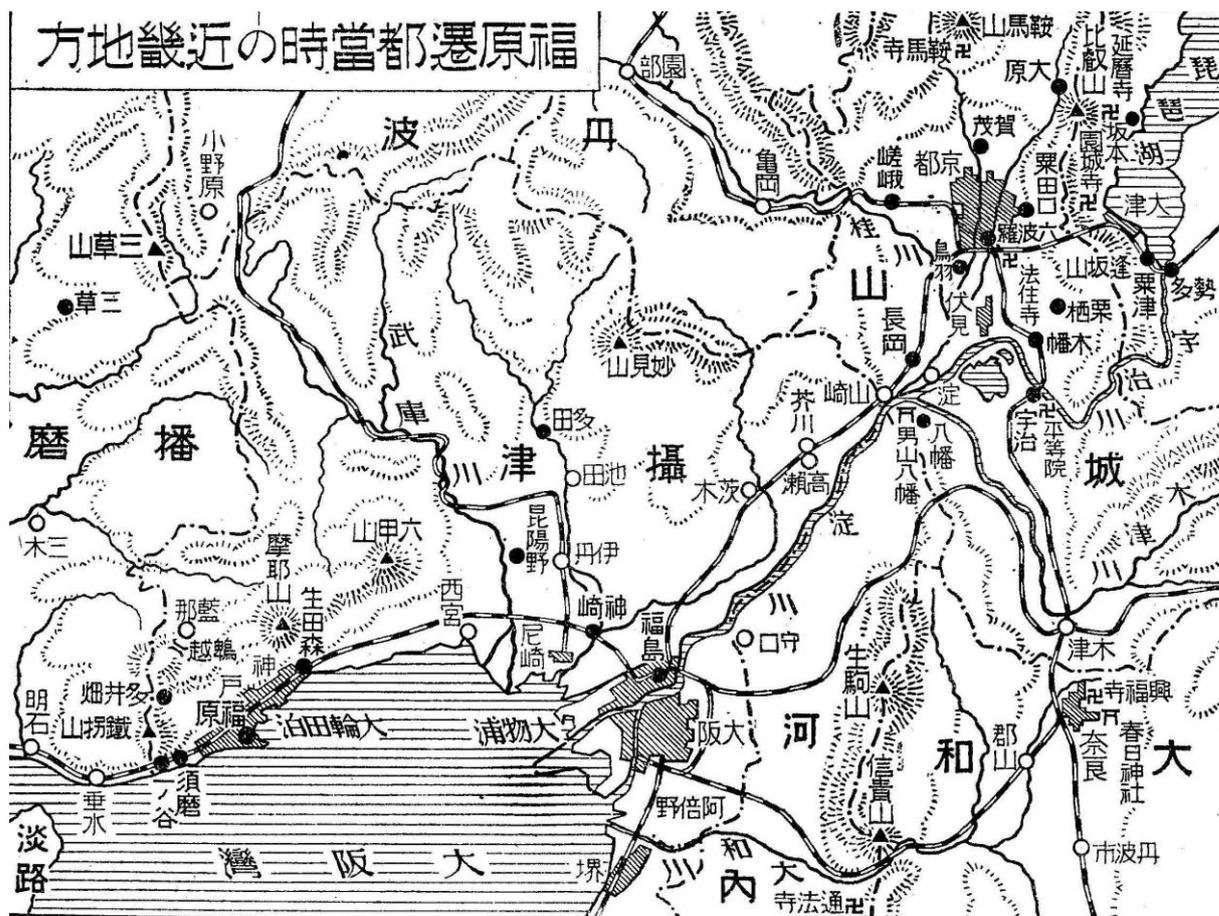
# 第13話 福原遷都

反対党の勃発に驚いた清盛は、俄かに衷心不安を感じて、都を福原に遷す。

さて平家を亡ぼそうとした第二の陰謀は、斯うして今度もまた難なく取鎮められましたが、しかし、今となつては、さすがに権威を誇っていた清盛も、平家を憎む者が殆ど天下に充ち満ちていることを認めないわけには行かなかつた。

## 清盛の不安

法皇を始め、その近臣をも、藤原氏の人々をも、源氏の武士をも敵としているばかりか、三井寺や興福寺のような大きな寺々をもいつか敵としてしまっていたのに気がついたので。又、この延暦寺にしても、今度だけは巧みに買取して源氏に背かせたが、いつまた引繰返つて敵となつてしまふかもしれない。いざという、神仏の威力をかざして都に乱入して来るこれらの僧兵には、白河法皇の御時以来、朝廷でさえもさんざん困らされたことを清盛も知っている。そういう危険な勢力の中に、何かというと平家に対して事を起こしたがる不平党に取り巻かれておいでの皇室を置くことは、どう考えても不安でたまらない。



## とつぜん せんと 突然の遷都

それで、清盛は、治承4年5月26日に起こつた宇治の戦いの後始末が、その月の30日に片づくつと、俄かに天皇を始め、法皇、上皇を奉じて都を摂津の福原に遷すことを発表して、6月2日には摂政藤原基通以

### 第13話 福原遷都

下の公卿<sup>くぎょう</sup>を引き連れて京都を出発した。福原はもともと清盛<sup>べっそう</sup>の別荘のあるところで、皇室を自分の勢力が完全に及ぶ<sup>およ</sup>処<sup>ところ</sup>に置いて、源氏や僧兵らに一本の指も触れさせまいとしたのでしょ

う。平家が天皇を奉じて居れば、その相手はいつも朝敵になるのですから、清盛の強みにしようとしたのに不思議はありません。

#### 福原の地形<sup>ちけい</sup>

又、福原の地勢が、うしろは山に囲まれ、前には兵庫の港<sup>ひょうご みなと ひか</sup>を控えて、東に生田の森、西に一の谷の嶮<sup>いくた いち たに けん</sup>を以って自然の城郭<sup>じょうかく</sup>をなしてもいたので、その頃瀬戸内海から九州にかけて最も勢力を張っていた平家が、ここを根拠地<sup>こんきょち</sup>にしようとしたものだともみられます。(訳注：福原の外港である大輪田泊<sup>がいがう おおわだのつまり</sup> (神戸市)を利用して、清盛は中国と日宋貿易を行い富を得た。)

#### 歎きの新都<sup>なげき しんと</sup>

けれども、この遷都<sup>せんと</sup>はいかにも早急<sup>そうきゅう</sup>な思い立ちだったので、その翌日に一同が福原に着いても、そういう多くの人々を入れる家の用意がありませんでした。皇居には、取りあえず頼盛<sup>よりもり</sup>の別荘を当て、上皇と法皇とは清盛<sup>のりもり</sup>の別荘と教盛<sup>のじゅく</sup>の別荘とにお入れしたが、朝廷の役人の多くは野宿をしなければならないような有様でした。それで、公卿<sup>ありさま</sup>や殿上人<sup>でんじょうびと</sup>は、まるで島流しにでも遭ったような気がして、この遷都を大いに悲しんだが、清盛は、そんな事には一向に頓着<sup>いっこう とんちやく</sup>しなかった。彼は新たに宮城の土地を定めて皇居<sup>こうきょ</sup>の造営<sup>ぞうえい</sup>にかかり、その11月11日にはそれが出来上がって、天皇は新たらしい内裏<sup>だいり</sup>にお遷り<sup>うつ</sup>になりました。

( 第13話 福原遷都<sup>ふくわらせんと</sup> 終わり。 次は前頁に戻り、第14話 源氏の挙兵 へ)